

朝鮮社会の近代的姿容と女子日本留学

——一九二〇—一九四五年——

朴 宣 美

【要約】 植民地本国の「知の生産システム」に依存せざるを得なくなった朝鮮では、東京を頂点とする「教育ヒエラルキー」が形成されていった。朝鮮の小さな村と東京を結ぶ「教育通路」が出来上がり、人々は植民地本国に知識や学歴を求めてその道を進んでいった。女子留学生はその道を歩む新しい集団としてあらわれた。植民地下朝鮮の女性にとって、日本留学は社会進出の重要な通路になっていった。

留学の動機は様々であったが、日本留学は一定の人々の間で共有される文化的行為として定着していった。つまり、人々は「教育ヒエラルキー」を上へ、上へ進んでいこうとし、より進んだ都会の空気を吸うために、中心部に編入される資質や資格を求めて、東京に流れ込んでいった。

日本の官民両者の立場からは、留学を文化交流として捉える観点はなかったが、それは朝鮮社会に新しい文化を伝播する重要な通路になっていった。中心文化が朝鮮の小さな村の隅々まで運ばれ、その中心文化を構成する様々な価値が植民地の人々に伝播されていった。その結果、人々はより進んだ東京に学びに行くことを憧れ、さらにそれを当たり前な行為として認識するようになった。

史林 八二巻四号 一九九九年 七月

はじめに

近代東アジアにおける日本留学は、欧米中心の世界資本主義システムの中にアジア地域が編入され、華夷秩序に基づい

た東アジアの地域秩序が日本中心の地域秩序へと改編されていく中で現れた歴史的現象である。言い換えれば、東アジア各国の近代化の変容過程で、日本から西洋へ、朝鮮、中国などアジア諸国から日本へという留学の主なパターンが生じたが、それは「近代化の担い手」の養成政策にはかならない。日本留学は、国家・民族の枠組みを越える「人の交流」・「知の交流」の大きなパイプでもあり、東アジアで通用する意識や行動などを生み出した。もちろん、異文化の相互交流という側面が弱く、西洋文化の一方的な伝播や受容が中心になっていた。日本留学を通じて、日本により濾過された欧米文明が東アジア諸国に受容されていった。

朝鮮人の日本留学は、一八八一年、紳士遊覧団の随員の中の三人が残り、慶応義塾や中村正直の同人社に学んだのが始まりであった。朝鮮政府は、一八九五年、約二〇〇人の留学生を派遣し、本格的な日本留学が始まった。一九一〇年以後、朝鮮では、植民地人のメトロ東京への「留学現象」が社会文化的現象として現れた。植民地化は、政治的、経済的収奪ばかりではなく、「知の独占」・「文化の独占」をももたらす。植民地の人々は植民地本国へ文化的に依存せざるをえなくなり、そこに「知」を求めなければならない。朝鮮人の日本留学は、このような文化的現象の所産であると同時に、それによって朝鮮社会は日本に文化的に深く依存させられていった。

「留学現象」は、伝統社会の解体とともに新たな社会体制に直面した人々が、反発や順応を繰り返しながら、新しい目標や志向を生み出していく過程とも関係している。例えば、「身分社会から学歴社会へ」という近代的社会変動の中で、社会階層移動の手段として学歴、特に留学を通じて得られる学歴が求められていった。

朝鮮の開化期に芽生えた学歴社会への変化は、学歴獲得への道が非常に狭く、植民地本国の「知の生産システム」に依存せざるを得ない「植民地型」の枠の中で進められていった。すなわち、朝鮮社会では、初等教育は邑(町)・面(村)で、中等教育は各府(市)で、高等教育は京城府あるいは日本で行われるなど、東京を頂点とした「教育ヒエラルキー」が作られていった。そこに、朝鮮の村と植民地本国を結ぶ「教育通路」が出来上がり、知識や学歴を求めてその道を進ん

でゆく「新しい集団」が生みだされた。例えば、一九二九年、朝鮮では、わずか一つの女子専門学校（梨花女子専門学校）に一三八人が在学していたが、日本では二二校の女子専門学校（東京一六校）^②に一五八人の朝鮮人女性が在学していた。^③一九三九年に淑明女子専門学校が設立されるまでは、日本の学校に在籍する朝鮮人女子学生の数が、朝鮮の学校の在籍数を上回っていた。男子学生の場合、一九二九年、朝鮮の専門学校や大学（予科含む）の在籍学生数一、四二一人に比べ、日本ではその数が二、一五三人に至った。^④一九四二年には、朝鮮で三、五一四人が在籍していたが、日本では六、八七七人が在籍していた。^⑤

このような朝鮮社会の「植民地型学歴社会」への移行は、人々の生活世界の変化をもたらす。「学びたい」という近代的なエネルギーが噴出し、「学校へ、上級学校へ行く」という与えられた、あるいは自ら与えた「近代的目標」を人々が発見し、自分の意識や行動を形作ってゆく。そのなかで、植民地の人々の「東京への志向」も高まっていく。

最後に、朝鮮近代女性史研究の一環として本稿が分析対象にする女子日本留学は、「近代化によるジェンダー構造の変化」に関係していることも指摘しなければならない。近代化は女性に「学校へ行く」という意識や教育の機会を与えるとともに、教員、医者、非熟練労働者、下級ホワイトカラーなどとして働く女性を生みだしてゆく。植民地下朝鮮の女性にとって、日本留学は専門職への社会進出の重要な通路になっていった。特に、朝鮮に中等教員養成制度や機関がなかった当時、女性が中等教員になるためには、植民地型学歴社会における最高エリート^⑥の道を進まなければならなかった。当時、生活改善運動、女性教育運動、女性解放運動などを中心になっていた女性の多くは、日本留学出身者であり、今後、彼女らの思想や行動を明らかにするためにも、まず、「女子留学現象」の社会的意味を問わねばならないだろう。

以上の問題意識を踏まえて、本論文では、第一章で、朝鮮人の日本留学の状況について概観する。第二章では、朝鮮総督府の留学生政策、柳原吉兵衛の場合にそくして女子留學生に対する民間日本人の認識、そして、留學生自身の日本留学に対する認識を明らかにする。第三章では、植民地下における朝鮮社会の変化につれ、日本留学に対する認識がどのよう

〈表1〉性別留学生数の推移

年度	総学生数	男学生数	女学生数
1910	420	386 (91.9)	34 (8.1)
1920	1,230	1,085 (88.2)	145 (11.8)
1926	3,945	3,711 (94.1)	234 (5.9)
1927	3,861	3,652 (94.2)	209 (5.8)
1928	3,753	3,521 (93.8)	232 (6.2)
1929	4,433	4,181 (94.3)	252 (5.7)
1930	5,285	5,070 (95.9)	215 (4.1)
1931	5,062	4,762 (94.1)	300 (5.9)
1932	4,977	4,664 (93.7)	313 (6.3)
1933	5,369	5,017 (93.4)	352 (6.6)
1934	6,093	5,703 (93.6)	390 (6.4)
1935	7,292	6,798 (93.2)	494 (6.8)
1936	7,810	7,301 (93.5)	509 (6.5)
1937	9,914	9,144 (92.2)	770 (7.8)
1938	12,356	11,441 (92.6)	915 (7.4)
1939	16,304	15,112 (92.7)	1,192 (7.3)
1940	20,824	19,117 (91.8)	1,707 (8.2)
1941	26,727	24,520 (91.7)	2,207 (8.3)
1942	29,427	26,480 (90.7)	2,947 (10.0)

出典：1910年度は、外務省記録文書「在本邦清韓兩國留学生員数表」1910年より、1920年度は、朝鮮総督府『最新朝鮮事情要』1920年より、1921～28年度は、朝鮮教育会奨学部『在内地朝鮮学生状況調』1926年、27年、28年より、1929～42年度は、内務省警察局編『社会運動の状況』1929～42年より作成。

- ① 朝鮮総督府『朝鮮学校一覽』一九二九年
- ② 朝鮮教育会奨学部『在内地朝鮮学生調』一九二九年
- ③ 内務省警察局編『社会運動の状況』一九二九年
- ④ 朝鮮総督府、前掲書、一九二九年
- ⑤ 内務省警察局編、前掲書、一九二九年
- ⑥ 朝鮮総督府、前掲書、一九四二年
- ⑦ 内務省警察局編、前掲書、一九四二年

第一章 朝鮮人日本留学の状況

にかわっていったのかを元女子留学生への聞き取り調査を通じて検討してみたい。また新しいジェンダー意識が、日本留学の重要な動機になっていったのか、女子留学生が果たした役割が何だったかについて検討する。

一九一〇年に四二〇人であった朝鮮人留学生数は、二〇年には一、二三〇人に至った。三八年には二万人を越え、四二年には三万人近くまで急増した(表1)。大規模な留学生が生み出された背景として、先行研究は、朝鮮における教育状況と朝鮮総督府の政策変化を指摘している^①。すなわち、朝鮮では高等教育機関をはじめ、各級学校数が不足していたが、人々の教育要求が高まり、留学希望者が激増していったこと、また、一九二〇年に私費留学が自由化され、留学生数が急激に増えはじめたことが挙げられた。

〈表2〉留学先の地方別分布

年度	総学生数	東京学生数	地方学生数
1920	1,230	1,090 (88.6)	140 (11.4)
1926	394	男 2,938 (79.2)	773 (20.8)
		女 148 (63.2)	86 (36.8)
		計 3,086 (78.2)	859 (21.8)
1930	5285	男 3,351 (66.1)	1,719 (33.9)
		女 132 (61.4)	83 (38.6)
		計 3,483 (65.9)	1,802 (34.1)
1935	7,292	男 4,316 (63.5)	2,482 (36.5)
		女 330 (66.8)	164 (33.2)
		計 4,646 (63.7)	2,646 (36.3)
1940	20,824	男10,193 (53.3)	8,924 (46.7)
		女 1,125 (66.1)	582 (33.9)
		計11,318 (54.4)	9,506 (45.6)
1942	29,427	男14,812 (55.9)	11,668 (44.1)
		女 1,972 (66.9)	975 (33.1)
		計16,784 (57.0)	12,643 (43.0)

出典：1920年度は、朝鮮総督府学務局『在内地朝鮮学生状況調』1920年より作成。そのほかは、〈表1〉と同じである。

本章では、従来、研究のなかった留学生の社会経済的背景の分析を試みる。

第一節 日本留学の概観

まず、全学種に在籍した留学生の性別分布（表1）をみよう。一九一〇年に女子学生は八・一%（三四人）、男子学生は九一・九%（三八六人）を占めていた。しかし、二〇年には女子学生の比率が増え、一一・八%（二四五人）に至った。二〇年代半ばから留学生数は急増していったが、女子学生の比率は一〇%以下であり、四二年になって、ようやく一〇%（二、

九四七人）を回復した。朝鮮の女性が近代教育を受け社会に進出するようになったが、男性に比べ教育の機会には制約されていた。

次に、留学先の地方別分布（表2）をみると、一九二〇年代には全体学生の七〇%以上が東京の学校に在籍していた。しかし、三〇年代以後は地方の学生が増え、約四〇%を占めるようになった。学校数が多い東京に大勢の留学生が集まるのは当然のことであるが、多くの元女子留学生が「日本に行くなら、やはり文化の中心地である東京に行きたかったです」と証言しているように、メトロ東京に憧れていたこともあるうなにより、朝鮮において上昇志向・中央志向の「植民地型学歴社会」が形成され、東京がその教育ヒエラル

〈表3〉出身道別留学生数の推移

出身道	1926	1927	1928	1929	1930	1933
京畿	425 (10.8)	402 (10.4)	440 (11.7)	375 (9.9)	389 (10.3)	410 (10.1)
忠北	107 (2.7)	94 (2.4)	85 (2.3)	96 (2.5)	110 (2.9)	90 (2.3)
忠南	156 (4.0)	155 (4.0)	160 (4.3)	153 (4.1)	135 (3.6)	149 (3.7)
全北	210 (5.3)	207 (5.4)	209 (5.6)	182 (4.8)	212 (5.6)	194 (4.8)
全南	504 (12.7)	550 (14.2)	496 (13.2)	526 (14.0)	518 (13.7)	576 (14.1)
慶北	405 (10.3)	396 (10.3)	358 (9.5)	389 (10.3)	365 (9.6)	445 (10.9)
慶南	534 (13.5)	522 (13.5)	518 (13.7)	529 (14.0)	582 (15.2)	617 (15.1)
江原	90 (2.3)	103 (2.7)	79 (2.1)	90 (2.5)	80 (2.1)	104 (2.6)
黄海	184 (4.7)	159 (4.1)	142 (3.8)	155 (4.1)	163 (4.3)	193 (4.7)
平北	299 (7.6)	308 (8.0)	307 (8.2)	345 (9.2)	346 (9.1)	336 (8.2)
平南	450 (11.4)	412 (10.7)	398 (10.6)	380 (10.1)	370 (9.8)	377 (9.2)
咸北	173 (4.4)	156 (4.0)	123 (3.3)	118 (3.1)	121 (3.2)	112 (2.7)
咸南	408 (10.3)	397 (10.3)	438 (11.7)	431 (11.4)	402 (10.6)	474 (11.6)
合計	3,945 (100.0)	3,861 (100.0)	3,753 (100.0)	3,769 (100.0)	3,793 (100.0)	4,077 (100.0)

出典：朝鮮教育会奨学部『在内地朝鮮学生調』1926, 27, 28, 29, 30, 33年より作成。

キーの頂点に位置していたからであろう。

留学生の出身地(表3)について、全羅南道と慶尚南道の出身者が多かつたが、出身道別留学生数は、大体、各道別人口分布に比例していた。ただ咸鏡南道と平安南道からの留学生の比率は、人口分布を大きく上回っていた^②。開国以来、キリスト教宣教師の活動が活発で、西洋文物がいち早く輸入されていた朝鮮半島北部では、近代教育に対する熱意も強かったと言われている。

学種別留学生数(表4)について、一九三〇年代までは高等教育機関に在籍した留学生が全体の四〇〜五〇%近くいた。しかし、四〇年代に入ってからはその比率が三〇%以下に減少していった。四〇年以降、中等教育機関に入学する朝鮮人学生が急増していったことが分かる。

留学生が何を勉強したか(表5)をみよう^③。一九三〇年に入ってから文科系を勉強する学生が増えていった。しかし、全時期を通じて、多数の学生は法科、商・経済科、工業科に在籍していた。留学生の在籍学科は、留学が出世の道であったことを示すと共に、「民族独立と近代化」という課題に対する当時の知識人の認識をも反映している^④。

〈表4〉学種別留学生数の推移

年 度	総 数	大 学 校	専 門 学 校	中 等 学 校
1920	1,141	69 (6.0)	384 (33.7)	688 (60.3)
1926	3,945	383 (9.7)	1,421 (36.0)	2,141 (54.3)
1927	3,861	399 (10.4)	1,352 (35.0)	2,110 (54.6)
1928	3,753	612 (16.3)	1,321 (35.2)	1,820 (48.5)
1929	4,433	1,227 (27.7)	1,084 (24.5)	2,122 (47.8)
1930	5,285	1,388 (26.3)	590 (11.2)	3,307 (62.5)
1931	5,062	1,392 (27.5)	532 (10.5)	3,138 (62.0)
1932	4,977	1,410 (28.3)	608 (12.2)	2,959 (59.5)
1933	5,369	1,568 (29.2)	571 (10.6)	3,230 (60.2)
1934	6,093	1,698 (27.9)	711 (11.7)	3,684 (60.4)
1935	7,292	2,104 (28.9)	1,058 (14.5)	4,130 (56.6)
1936	7,810	2,001 (25.6)	1,066 (13.7)	4,743 (60.7)
1937	9,914	1,738 (17.5)	1,983 (20.0)	6,193 (62.5)
1938	12,356	2,448 (19.8)	2,183 (17.7)	7,725 (62.5)
1939	16,304	1,596 (9.8)	3,934 (24.1)	10,774 (66.1)
1940	20,824	2,305 (11.1)	3,624 (17.4)	14,895 (72.5)
1941	26,727	3,173 (11.9)	4,400 (16.5)	19,154 (71.6)
1942	29,427	2,788 (9.5)	4,595 (15.6)	22,044 (74.9)

- 注1) 専門学校は学制によって同じレベルに分類される高等学校も含んだもの。
 2) 中等学校は大学や専門学校を除き各種学校などすべての学校を含んだもの。
 3) 大学は大学予科も含んだもの。
 出典：〈表2〉と同じである。

〈表5〉学科別留学生数の推移

年 度	履 修 学 科													合 計
	法	経済	商	文	理	工業	農林	水産	医薬	師範	音楽	美術	家政	
1920	308 (58.6)	—	63 (12.0)	42 (8.0)	6 (1.1)	34 (6.5)	12 (2.3)	—	34 (6.5)	14 (2.7)	5 (1.0)	7 (1.3)	—	525 (100.0)
1926	607 (22.1)	205 (7.5)	447 (16.3)	320 (11.7)	61 (2.2)	514 (18.8)	115 (4.2)	10 (0.4)	149 (5.4)	243 (8.9)	33 (1.2)	36 (1.3)	—	2,740 (100.0)
1927	448 (16.3)	213 (7.7)	474 (17.2)	369 (13.4)	106 (3.9)	547 (19.9)	157 (5.7)	13 (0.6)	146 (5.3)	182 (6.6)	45 (1.6)	50 (1.8)	—	2,750 (100.0)
1928	531 (16.7)	183 (5.8)	571 (18.0)	441 (13.9)	117 (3.7)	656 (20.6)	190 (6.0)	17 (0.5)	208 (6.6)	167 (5.3)	44 (1.4)	48 (1.5)	—	3,173 (100.0)
1930	667 (30.7)	290 (13.3)	215 (9.9)	433 (19.9)	80 (3.7)	58 (2.7)	141 (6.5)	7 (0.3)	103 (4.7)	95 (4.4)	14 (0.6)	42 (1.9)	30 (1.4)	2,175 (100.0)
1933	590 (43.1)	168 (12.3)	140 (10.2)	125 (9.1)	11 (0.8)	61 (4.5)	60 (4.4)	4 (0.4)	80 (5.8)	55 (4.0)	7 (0.5)	23 (1.7)	44 (3.2)	1,368 (100.0)

- 注1) 全体学生数から普通科に在籍した学生数を除いたもの。
 2) 1920年の法科は、法政経社会をあわせたもの。
 3) 1920～28年度には、家政科の統計が別に示されていない。
 出典：1920年度は、朝鮮総督府学務局『在内地朝鮮人学生状況調』1920年より作成。そのほかは
 〈表3〉と同じである。

第二節 女子日本留學生の状況

—— 専門学校を中心として ——

一九四〇年以前、女子留學生の約五〇%以上は、専門学校や大学に在籍していた。大学への留学は二九年から始まって、三〇年代には女子留學生全体の五〇%になった。専門学校への留学は、二〇年代後半から三〇年代中盤にかけて全体の四〇%以上を占めた。四〇年代に入ってから、中等学校への女子留學生数は約八〇%にまで増えた反面、高等教育機関で学ぶ女子留學生の比率は減少していった(表6)。

植民地時代に日本の高等教育機関に在籍した朝鮮人女子留學生の中、七七八人の実名が本研究の学校調査や聞き取り調査により把握された。朝鮮人女子留學生が在籍した全ての専門学校や大学を調査することは出来なかった。また、創氏改名による日本姓の使用、中国人との判別困難、そして名簿の不備や欠落などで、各学校の留學生全員の把握も不可能であった。しかし、在籍学校のリストと学生数を提示した表7によれば、多くの女子留學生は美術学校、体育専門学校、医科専門学校などで学んでいたことが分かる。

最も多くの女子留學生が学んでいた学科は家政科(約三〇%)であった。すなわち、多数の女子留學生は、家政科や医科の理科系(四六・五%)と、美術や体育の芸術・体育系(二九・四%)で学び、社会系で学ぶ者(五・三%)は少なかった(表8)。

〈表6〉学種別女子留學生数の推移

年度	総数	大学校	専門学校	中等学校
1926	234	—	88 (37.6)	146 (62.4)
1927	209	—	102 (48.8)	107 (51.2)
1928	232	—	121 (52.2)	111 (47.8)
1929	252	22 (8.7)	136 (54.0)	94 (37.3)
1930	215	29 (13.5)	106 (49.3)	80 (37.2)
1931	300	15 (5.0)	126 (42.0)	159 (53.0)
1932	313	19 (6.1)	103 (32.9)	191 (61.0)
1933	352	20 (5.7)	124 (35.2)	208 (59.1)
1934	390	26 (6.7)	165 (42.3)	199 (51.0)
1935	494	35 (7.1)	252 (51.0)	207 (41.9)
1936	509	18 (3.6)	245 (48.1)	246 (48.3)
1937	770	16 (2.1)	317 (41.2)	437 (56.7)
1938	915	38 (4.2)	396 (43.3)	481 (52.5)
1939	1,192	55 (4.6)	410 (34.4)	727 (61.0)
1940	1,707	11 (0.7)	434 (25.4)	1,262 (73.9)
1941	2,207	20 (0.9)	442 (20.0)	1,745 (79.1)
1942	2,947	16 (0.6)	490 (16.6)	2,441 (82.8)

注) 分類方法や出典は、〈表4〉と同じである。

〈表7〉女子留學生の在籍した学校と學生数（1912～44年）

学校名	人数	学校名	人数
同志社女子専門学校	60	京都府立女子専門学校	1
京都女子高等専門学校	20	日本女子大学	69
東京女子高等師範学校	53	津田塾専門学校	6
実践女子専門学校	28	東京女子大学	9
東京女子医学専門学校	61	帝国女子医学専門学校	47
日本女子体育専門学校	80	東京女子体育音楽学校	1
日本体育会体操部	1	帝国女子専門学校	83
女子美術学校	107	武蔵野音楽学校	22
東京家政専門学校	9	共立女子専門学校	1
共立女子薬学専門学校	1	東京女子薬学専門学校	1
和洋女子専門学校	1	横浜女子神学校	1
女子経済専門学校	1	日本女子高等商業学校	20
奈良女子高等師範学校	59	大阪女子専門学校	1
梅花女子専門学校	2	大阪音楽学校	6
梅光女学校専門部	1	広島女子専門学校	3
広島保師専修学校	1	ランバス専修学校	4
神戸女子神学校	13	東北帝国大学	3
九州帝国大学	1	計	777

注) 777人は、学校調査と聞き取り調査により把握された人数である。学校調査は、①朝鮮総督府学務局『在内地朝鮮人学生状況』1920年、②朝鮮教育会奨学部『在内地朝鮮学生調』1926、27、28年、③植民地時代に朝鮮で出版された雑誌や新聞などにもとづき、当時、朝鮮人女学生が在籍していたことが確認される45校の専門学校を対象にした。今回、27校の調査を行い、16校については学校当局からの協力を得られず調査ができなかった。残りの2校は、関係資料がないという回答を得た。学校調査は、訪問調査や書面調査で行い、各学校の設立以来1945年までの同窓会名簿、校誌や同窓会誌、学籍簿などを調べ、在籍した朝鮮人女学生の名簿を確認した。そして、可能な範囲で、入学年度、卒業年度（中退者の場合はその年度と理由）、専攻科目、出身地、保証人、家庭環境（親の職業など）、留学直前の学歴、卒業後の事情などを調べた。聞き取り調査は、20校からの64人の卒業生や中退者に対して行った。

〈表8〉女子留学生の学科別分布（1912～44年）

人文系	国文科	30 (3.9)	社会系	社会科	12 (1.6)
	英文科	54 (6.9)		経済科	21 (2.7)
	文科	48 (6.2)		図書科	1 (0.1)
	神学	14 (1.8)		保育科	7 (0.9)
	計	146 (18.8)		計	41 (5.3)
理科系	家政科	232 (29.9)	芸体系	音楽科	29 (3.7)
	理科	19 (2.4)		美術科	107 (13.8)
	医学科	103 (13.3)		技芸科	9 (1.2)
	薬学科	7 (0.9)		体育科	83 (10.7)
	計	361 (46.5)		計	228 (29.4)
総計 776 (100.0)					

注) 776人は、〈表7〉と同じ調査で把握された人数である。

〈表9〉女子留学生の父母の職業

区分	内容	人数	百分率
第一次産業に 属するもの	地主	63	35.2
	自作農	2	1.1
	水産業	1	0.7
	計	66	36.9
	第二・三次産業に 属するもの	貿易業	11
鉱産業		5	2.8
製造業		8	4.4
建設業		1	0.7
金融業		2	1.1
米流通業		2	1.1
商業		42	23.4
官吏		12	6.7
言論人		2	1.1
医者		9	5.0
弁護士		2	1.1
銀行・会社員		10	5.6
教員		4	2.2
牧師		3	1.7
計		113	63.1
総計		179	100.0

注) 179人は、〈表7〉と同じ調査で把握された人数である。

女子留学生の社会経済的背景として父母の職業(表9)をみよう。農業が一位を占め、三六・三%、商業がそれにつき二三四%であるが、全体(二七九人)の六三・一%は二・三次産業に属していた^⑥。また、聞き取り調査の対象者(六四人)中、父母の財産が先代からの遺産である人は三五人(六二・五%)、一代で財をなした人は二二人(三七・五%)であった。つまり、多くの女子留学生は、経済の近代化がもたらした新しい職業を経済的基盤とし、新しく財産を蓄積した社会階層の出身である。

最後に、彼女らの出身家庭の開化程度を分析するため、家族の宗教、父母の教育程度、兄弟の日本留学経験、日本留学

に関する父母の意見について聞き取り調査を行った。家族の宗教がプロテスタントである人は、二三・八%（二五人）を占めた。^⑦一九世紀半ばから朝鮮では、キリスト教が西洋文明を伝えるパイプとしての役割を果たした。特に宣教師は女学校を設立するなど、女性教育の発展にも貢献してきた。当時、プロテスタントになることは、西洋近代文明の受け入れに積極的であったことを意味しており、女子留学生の場合、このような家庭の出身者が多かった。

近代教育を受ける人が非常に限られていた朝鮮で、父が初等教育以上を受けたケースは四五・九%（母の場合、九・五%）であった。また、女子留学生の五一・六%（三三人）は兄弟に、一五・六%（一〇人）は近い親戚に日本留学生がいた。多数の女子留学生は、近代教育を受けた家族の者が多く、結局、男女教育に差別をおかない家庭の出身であった。これは日本留学についての父母の意見を見ても分かる。八四・四%の父母は、始めから日本留学に賛成していた。

① 阿部洋「解放前韓国における日本留学」『韓』第五卷二二号、一九七六年、三二七頁

② 一九三三年度の道別人口分布は、全体人口約二千万人中、京畿・全南・慶北・慶南が二〇〇万―二二〇万人、忠南・全北・黄海・平南・平北・江原・咸南が一三〇万―一五〇万人、咸北・忠北が七〇万―一八〇万人である。朝鮮総督府『朝鮮総督府統計年報』一九三三年

③ 官費留學生の推移に関しては、阿部洋、前掲書、五〇頁を参照。彼らの履修学科は、農林業・蚕業・水産業・工業・商業などの産業分野と医科に集中していた。女子官費留學生は、一九二〇年には全体三五人の一一・四%（四人）、二八年には全体八一人の三四・六%（二〇人）を占めた。彼女らも医学や産業分野に派遣されていた。

④ 杉原達の研究によれば、朝鮮人学生は、個人的な上昇志向があるいは朝鮮人の権利擁護という民族的な目的を持って、法科で学ぼうとした。「旧制関西大学」に在籍した朝鮮人学生の修学状況」「旧制関西大学」に在籍する朝鮮人学生に関する調査・研究」関西大学人権問題研究室

⑤ 紀要、第一三三号、一九八六年、三〇―三二頁

朝鮮総督府の一九三〇、三三年度『在内地朝鮮学生調』によっても、多くの女子留學生は、家政科や医学科に在籍していたことが分かる。しかし、三〇年に入ってから、法学や経済学を学ぶ女子学生もみられるようになった。

⑥ 一九三八年度、人口約二千二百万人のうち、農業に従事した人が七五・七%で、工・商・自由業の比率は少なかった（朝鮮総督府『朝鮮総督府統計年報』一九三八年）。しかし、女子留學生はそのような職業の家庭の出身者が多かった。

⑦ 一九三八年度、朝鮮での各宗教の人口は、キリスト教及び仏教が約五〇万人、神道が約一〇万人であった（朝鮮総督府、前掲書）。女子留學生の中ではキリスト教徒が多かった。

⑧ 一九四一年、初等課程では約百八〇万人、中等課程（中等レベルの各種学校と実業学校を含む）では約八万人、専門課程以上（師範学校を含む）では約六千人が教育を受けていた。朝鮮総督府『朝鮮諸学校

第二章 日本留学に対する政策と民間日本人・留学生の認識

第一節 朝鮮総督府の朝鮮人留学生政策

一 旧韓末の留学生政策

一八七六年の開国後、朝鮮政府は、近代化の担い手養成のために、明治維新後の文明開化や清国の洋務運動を模範とし、両国に留学生を派遣した。しかし、一八九四年の甲午改革以後は、日清戦争に勝利した日本に大規模な官費留学生を送った。朝鮮人留学生を誘致するため、日本政府も積極的に働きかけた。^①

一九〇五年、第二次日韓協約によって朝鮮が「保護国」になると、統監府が留学生政策を指揮した。私費留学生の急増につれ、一九〇七年に「日本国留学生規程」が制定された。そして東京に「韓国留学生監督部」も設置された。この規程は、官・私費を問わず、留学生の選抜、留学先の選択、在留期間、留学生の行動に関する監督事項などを定めたもので、一九〇八年、「学部所管日本国留学生規程」へと改正された。^②それによって、履修学科、留学期間などは、官費留学生に限定し指定された。しかし、生活監督事項は全学生を対象とし、そのまま維持された。この規程は併合後、朝鮮総督府の留学生政策に受け継がれた。

二 朝鮮教育令の時期（併合から一九一九年まで）

朝鮮総督府は一九一一年、朝鮮教育令を公布し、教育の基本方針を明らかにした。すなわち、忠良たる国民の養成のために必要な教育、また植民地の政治経済的状况と人々の意識に相應する教育を主唱した。その結果、普通教育と実業教育

に比べ、高等教育は等閑視された。

この方針は、朝鮮教育令に先だつて、同年六月に制定された「朝鮮総督府留学生規程」と「留学生監督規程」にも反映されていた。「官費留学生ハ特ニ内地留学ヲ必要トスル學術技芸ヲ履修セシムル為朝鮮総督ノ指定スル官立若ハ公立ノ学校・伝習所又ハ講習所ノ卒業生ニシテ校長若ハ所長ノ推薦ニ係ル品行方正、学力優等、身体健全ナル者ニ付朝鮮総督之ヲ命ス」と、少数者に特定の学問分野に限つて、日本留学を許可した。私費留学の場合にも許可制を基本とした。すなわち「私費ヲ以テ内地ニ留学セムトスル者ハ予メ其履修学科、入学スヘキ学校、入学及出発ノ時期ヲ具シ履歷書ヲ添付シ地方長官ヲ經由シテ朝鮮総督ニ届出スヘシ」という規定によつて、留学手続きを終え渡日した者は、再び留学生監督の入学許可を得て入学手続きをとらねばならなかつた。

留学生は「取締・監督すべき存在」として認識され、成績、品行、思想の監視を受けていた。植民地支配体制においては、「知」の受容、新しい文化との接触、そして人と人の交流という留学の本来の意味は始めから考慮されていなかった。むしろ、「都会ノ弊風ニ浸潤シ輕佻ニ流ルルノ傾向アリ」という発言から分かるように、留学を通じて様々な思想や風潮が朝鮮に輸入されるのを恐れて、留学生を監視し留学を抑制していたのである。

三 第二次朝鮮教育令の時期（一九二〇～三六年）

一九一九年に爆発した三・一運動をきっかけに、植民地支配の基本方針は、いわゆる武断統治から文化統治へと変化し、留学生政策も修正された。それは、齋藤実総督の「朝鮮統治の基本案」の親日人材の養成方針に沿うものであった。

一九二〇年、「在内地官費朝鮮学生規程」^④が定められた。官費留学は、旧規程と同じく、総督が認める分野に限つて派遣されたが、私費留学は自由になった。また新規程には、留学生の生活監督に関する条項が廃止された。しかし、阿部洋の指摘のように、^⑦留学生の思想・行動に対する規制が実際上弱められたわけではない。朝鮮総督府は一九二〇年、東洋協

会に「朝鮮学生督学部」を設け、二四年まで留学生監督を委託した。その後、留学生をより効率的に監督するため、「朝鮮教育会」がその業務を担当した。^⑧

一方、従来の取締に基づいた監督・統制の方法以外に「懐柔、輔導、感化」などの方法も導入された。いわゆる「不逞鮮人」には嚴重な取締を、「健全な」学生には就職斡旋などの「懐柔、輔導」の方針をとった。^⑨ その結果、要視察朝鮮人として取締られた留学生数は、一九二六年に二六三人の中七三人に至った。^⑩ また、談話会の開催などを通じて、留学生に精神的な「感化」を与えようとした。^⑪

要するに、この時期において、留学は奨励されたとは言いがたいが、自由になった。しかし、植民地支配に協力する中堅人物の養成という目的によって、留学生監督は益々強化された。その結果、従来の留学抑制政策が繰り返される面もあった。^⑫ 被支配者の政治的主権を根本的に否定する植民地支配においては、たとえ文化統治が打ち出されても、留学に文化交流の通路という社会的意味付与はなされなかった。

四 皇民化政策の時期（一九二七～四五年）

満州事変から日中戦争へと、日本の侵略戦争が拡大するにつれて、同化主義という朝鮮支配の基本政策は極端化し、南総督の赴任以後、朝鮮人を忠良なる皇国臣民たらしめんとする皇民化政策が次々と推進された。その中でも、戦時総動員体制を打ち立てていく上で、皇国臣民の動員と統制が重要な課題になっていった。朝鮮人兵士や労働者の動員策のみならず、朝鮮人指導者を育成する施策も強調された。

留学生政策も新たな局面を迎えた。南総督は、従来の留学生政策が消極的で、不十分な人材養成の施策であったとし、新たな政策を模索した。その結果、一九四一年に「朝鮮奨学会」が創立された。^⑬ 同会の業務は、①入学の適正を期する進学指導、②在学生の資質向上及修学の便宜を図る指導保護、③卒業者の職業指導斡旋に分けられた。^⑭ それは、入学から卒

業後までの綿密な生活指導監督を通じて、徹底した皇国臣民の精神をもつ中堅人物の養成を狙ったものであった。

朝鮮奨学会の具体的施策として「進学保証制」が採択された。それは、朝鮮総督府により厳選・登録された学生を、朝鮮奨学会が保証し入学に協力する制度であった。留学を望む者は、最も確実な方法として朝鮮奨学会の保証を得るため、自発的に朝鮮総督府の審査を受けるという仕組みで、留學生が最初から徹底的に把握・管理されるようになった。

朝鮮奨学会は、一校に連絡員の設置、学生寮の経営、学籍や生活状況や思想動向の調査、そして卒業者の職業斡旋という多様な方法で、留學生の生活や思想を管理しようとした。特に、いかにして留學生に日本精神を注入するかに注意を払い、各種の錬成会や修養会などを主催した。その一環として「農村婦人生活体験会」が女子留學生を対象にして計画された。また、学生が名望家の影響を受け「皇国臣民の姿勢」を体得するように試みられた。

以上で、朝鮮総督府の留學生政策の変遷について検討した。一九一〇年代の抑制政策が二〇年代から自由化政策にかわり、第一章で検討したように、大規模な留學生が生み出された。留學生を「民族独立運動の貯水池」と見なしたように、日本留学に対する否定的視角は根本的に変わらなかった。しかし、一九二〇年代に入ってから、留學生は親日勢力の養成手段としても認識されはじめ、四〇年代にはこの傾向がさらに強まって、留學生に対する全面管理体制が導入された。朝鮮総督府は、留學生に近代文明の移植者としての役割を付与しようとはせず、植民地支配に必要な近代的技術と皇国臣民の精神という、相反する要求を満たすことを期待した。一方、全体留學生の五―一〇%を占めた女子留學生に対して別途の指針が設けられたという資料は、今のところ知られていない。

第二節 柳原吉兵衛の朝鮮女子留學生についての認識

柳原吉兵衛は、一九二一年、大阪に内鮮協会を設立するなど、官憲の在日朝鮮人対策に深く関わった人物である。彼の活動の全体像は未だ不明であるが、その一部が戦時下朝鮮人統制機関である協和会の実体を究明した樋口雄一によって明

らかにされた。^⑩ ここではキリスト教徒、工場経営者、そして社会福祉事業を行う地域の名望家として、内鮮融和のために果たした彼の役割が検討された。しかし、柳原が一九二〇年、李王世子垠と梨本宮方子との結婚を記念し、「李王家御慶事記念会」（以下、記念会と呼称）を設け、四五年一月に亡くなるまで、朝鮮人女子留学生対策に積極的に関わってきたことは、今まで知られていない。この節では、朝鮮人女子留学生に対応しようとした柳原の認識を、彼が残した日記や資料をもとにして編集された『青霞翁柳原吉兵衛傳』^⑪を中心として明らかにする。

柳原が朝鮮に対する関心を持ち始めたのは、一九〇六年、紡績業界の私設経済視察団の一行として、初めて朝鮮に渡った時からである。その時、日本人の朝鮮人に対する態度や無法な振る舞いを見て衝撃を受け、「日本の保護国となった朝鮮人に対する邦人が、たとえ下役と労働者の場合であっても、こんなことで指導できる訳はない。彼らを心服させて指導するということは暴力では出来るものではない」と思ひ、^⑫ 内鮮融和に乗り出す決心を固めたという。その後、一八九六年に堺市で創業した「大和川染工所」を舞台として、在日朝鮮人の職業斡旋や日本語教育などに力を入れた。

朝鮮人女子留学生に関する活動は、一九二〇年、「記念会」を設けたことから始まった。「記念会」は、朝鮮の女子高等普通学校や高等女学校の最優等卒業生を表彰し、その一部の学生を日本に留学させ、援助することを主な事業とした。なぜ、彼が朝鮮の女性教育に関心を持ち、支援することになったかについて、『青霞翁柳原吉兵衛傳』に次のように述べられている。「いずこの民族にしても女性は母となつて次期の国民を育てるものである……先ず少女たちの公立女学校に学ぶ者たちから向学心をつよく助長し、日鮮両民族の心からの融和を理解させることである。それはやがて母となる者であり、また上級学校を志す者は指導の任に当たる教育家となるのだから、斯ういう女性教育こそ重要視すべきだ」^⑬。

このように柳原は、内鮮融和のためには、母であり、また教育家となる女性の役割が重要であるという認識に立っていた。そして朝鮮人女学生を奈良女子高等師範学校に入学させることに尽力した。奨学金の提供、日常生活の支援、卒業後、彼女らの朝鮮の勤務地への訪問に至るまで、柳原は女子留学生と深い関わりを持ち続けた。

このような柳原の活動は、一九二〇年代以来、親日的な中堅人物を留学生などから育てようとした朝鮮総督府の方針と一致する。しかし、総督府が女子留学生対策について何の方針も持っていなかったのに対し、彼はむしろ女子留学生の将来果たす役割を重要視した。

また、柳原の留学生への対応は、朝鮮総督府が従来一貫してきた取締・監視を優先する方針とは異なる立場から出発していた。すなわち、留学生を内鮮融和のための最も重要な架け橋として認識し、穏健で柔軟な態度で留学生に対応しようとした。内鮮融和のため、将来の朝鮮の中堅指導者である留学生に日本精神を注入・鼓吹しなければならぬ。そのためには、彼らに日本文化を理解させたり、名望家に接触させるなど、様々な「文化的」な方法を模索しなければならないという考えであった。この観点は、彼の「朝鮮子弟教育に関する卑見」^{②③}に提示され、一九二八年春の全国の地方長官会議においてそれを配布し、以後も毎年、その意見書を配ったという。

前節でふれたように、一九二〇年代以後、朝鮮総督府は、留学生に対する取締政策以外に懐柔、輔導、感化という多様な方法を導入しようとした。このような新たな方針は、四〇年代に入って、南総督によって柳原の持論を受け入れられる形で、より積極的に進められた。しかし、柳原が南総督に直接的に与えた影響については今のところ確認できない。

女子留学生への彼の影響に対しては、「日本くささ」をふりまかずキリスト教精神にあふれ、愛を施す彼の人間性が女子留学生の心に訴えたことが元女子留学生の証言から分かる。彼女らは名望家柳原との交際によって、何らかの「感化」を受けていた。しかし、柳原が本来考えていた留学生の日本精神の確立という課題が必ずしも実現されたかは疑問である。元女子留学生からの聞き取りだけでは、この問題の解明は不十分であろう。^④

柳原には、留学生に日本文化を伝え、日本精神を注入するという視点はあった。しかし、異文化の人との交流、朝鮮と日本の文化の交流という観点から、自らと留学生との関係を想定してはいなかった。彼は、「この六名「朝鮮人女子留学生」に日本国民の美点とよい気分を十分に味あわせ善導して第二国民の母たる之等女性を通じて、真に同胞相愛の実を期

したいとは我らの願いである」と日記に書いたように、朝鮮民族を日本民族に同化させようとしたが、相互交流を深め、新たな文化を作り出すような考えはなかった。

しかし、彼は日本語の普及や皇室への忠誠心を押しつける従来の同化政策とは一定の距離をおいていた。つまり、植民地支配に対し単なる協力を行ったり、屈従したりする人間を作り出すよりも、自ら日本の植民地支配の妥当性を納得し、その社会の一員として積極的に協力する人間を生み出そうとした。

第三節 留学生の日本留学に対する認識

留学生自身は、日本留学についてどのように認識していたのか。ここでは「東京朝鮮留學生学友会」の機関誌である『学之光』²³などの分析を中心として、主に一九一〇年代にあらわれた彼らの認識を、①日本で何を学ぶのか、②なぜ日本に留学するのか、③留学生の役割は何かという、三つの点に分けて検討する。

まず、留学生が日本で学ぼうとしたのは、明治維新前後に日本が輸入した欧米文明である。「法律もいい、政治もいい、自然科学もいい……それもこれも朝鮮文明に新たな貢献をして、朝鮮民族に新たな福音を伝えんとするなら、勉強なら何でもし、思潮ならばすべて紹介するのが、今日、我々がなさんとする謀りごと」と述べているように、朝鮮に新たな発展を引き起こすことができるものなら、すべての学問を日本で学ぼうとした。また、その文明の源泉が西洋であることを認識しており、日本から西洋に送られた海外留學生の行跡を見習い、日本で新知識を学ばねばならないと主張した。²⁴

しかし、欧米の近代文明を学ぼうとしながら、日本に留学した理由は、欧米文明を吸収・消化した「生きている学問」があるからであり、欧米文明を「日本化」した体験や技術を持っているからであると論じられた。²⁵つまり、日本によって濾過された欧米文明を東アジア各国が輸入するという、当時の東アジアにおける欧米文明受容の主なパターンを、その受容の通路になっていた留学生自身が明確に意識していたのである。

このように留学生は自らを「文明の輸入者」と位置づけ、その役割によって朝鮮の文化発展の成否が決せられると認識していた。^③しかし、彼らの間では、欧米文明の輸入がもたらす弊害や輸入の方法をめぐって意見が分かれていた。一方では、輸入により朝鮮の固有文化が解体するとし、急進的な文明輸入に反対する意見と、他方では、弊害を恐れず「近代化の標本」を一日も早く輸入しなければならないという意見が対立していた。^④

さて、彼らは文明の輸入者として、具体的にどのような役割を引き受けようとしたのか。女子留学生の場合、代表的な二つを挙げてみるなら、学んだものを子供に教える教諭と、伝統的な家庭内の女性の役割を新しく解釈し改革する「新主婦」を目指すことであった。^⑤

以上の留学生の認識は、近代朝鮮における民族主義右派の政治思想として、様々な社会運動を呼び起こした「実力養成論」に根をおろしていた。「朝鮮民族の独立力量の不足」という判断に立って、民族の実力を養成した後、はじめて独立が可能であるという実力養成論は、日本留学生の間に広く受け入れられていた。^⑥その思想的流れは、今回、インタビューした一九三〇、四〇年代の女子留学生にも認められる。

要するに、朝鮮総督府の留学生政策がどうであれ、留学生とかわる民間日本人の目的が何であれ、留学生自身は先進文明を輸入し朝鮮に新文化を起こし、独立を達成するための実力を身につけようとしていた。近代朝鮮知識人にとって日本留学は、植民地支配によって奪われた「近代化をすすめる主体」としての役割を果たそうとした高度に自発的な行為であった。もちろん、このような主体的努力は、植民地体制によって根本的に制約されていた。その役割は、植民地支配によって制度化された役割と矛盾し、放棄せざるを得なくなっていた。留学生の中には、日本の支配体制に積極的に協力するものも現れてきた。

① 朝鮮公使井上馨は一八九四年、朝鮮政府に「内政改革綱領二〇条」を提案し、「各科目ニ就キ之ヲ研究スル為メ、日本ニ留学生ヲ派遣シ、

人材ヲ養成スルコト必要ナルベシ」と、留学生の派遣を強く勧誘した（阿部洋、前掲書、二四頁）。

- ② 一九〇〇年に一四八人であった私費留学生は、次第に増加し、一九〇九年には八八六人に至った。『学之光』第六号、一九一五年、二二―三頁
- ③ 阿部洋は、一九〇六年に「学部所管日本國留学生規程」が制定されたと説明している（前掲書、三三頁）。しかし、その規程の改正についてはふれていない。李元浩、『開化期教育政策史』（文音社、一九八三年、朝鮮語）所収の兩規程の全文によれば、一九〇七年の規程が、その翌年に改正されている。
- ④ 特に実業分野の留学が奨励された。朝鮮總督府『朝鮮教育要覽』一九一五年、九頁参照。
- ⑤ 朝鮮總督府『朝鮮統治三年間成績』一九一四年、六〇頁
- ⑥ 一九二二年には「在内地給費生規程」へと改正され、その新規採用は三〇年度に中止された。
- ⑦ 阿部洋、前掲書、四八頁
- ⑧ 一九二五年九月からは、朝鮮教育会に「奨学部」という担当部署が設けられた。その重要な業務は、留学生の入学事務の整理統一であった。学生が学校に直接提出した入学願書が、奨学部に廻され整理・様式の統一が行われた。これによって、留学生の入学動静が正確に把握されていた。他の奨学部の業務については、朴尚偕「東京朝鮮人諸団体歴訪記」「朝鮮思想通信」一九二七年二月一日を参照。
- ⑨ 警保局保安課「大正一四年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況」一九二五年、一八五頁
- ⑩ 警保局保安課、「大正一五年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況」一九二六年、二〇五頁
- ⑪ 例えば、朝鮮教育会奨学部は、一九二九年一月、奨学部仮会館で、東京の女子留学生を対象とする「女子談話会」を開催した。朝鮮教育会『奨学部報』第三号、一九二九年三月、四―五頁
- ⑫ 一九二六年七月、視学官会議での「学務当局の指示事項」（『東亜日報』二六年七月一日）、一九二八年六月の京畿道各公立中等学校長会合（『東亜日報』二八年六月二六日）、『東亜日報』一九三四年六月十七日に報道された總督府の留学生方針などにその例がみられる。
- ⑬ 「第三回中枢院會議に於ける總督訓示（一九四一年六月一日、總督南次郎）」「朝鮮總督府文書課編纂『諭告訓示演述総攬』第二輯（朝鮮行政学会、一九四三年）一四―一五頁を参照。
- ⑭ 朝鮮奨学会「昭和一七年度事業概要」「在日朝鮮人史研究」第二四号、一九九四年九月所収。
- ⑮ 文部省教学局「事変下に於ける朝鮮人思想運動に就て」一九四一年、朴慶植「在日朝鮮人関係資料集成」第四卷（三一書房、一九七六年）二二〇八頁に所収。
- ⑯ 樋口雄一「日本人の在日朝鮮人対応——柳原吉兵衛と協和会」「協和会——戦時下朝鮮人統制組織の研究」（社会評論社、一九八六年）二二八―二三頁
- ⑰ 梅田安之「青霞翁柳原吉兵衛傳」全三冊、一九四九年（非売品）
- ⑱ 梅田安之、前掲書、一〇七頁
- ⑲ 梅田安之、前掲書、三五七―三五八頁
- ⑳ 梅田安之、前掲書、二八四―二八六頁（この意見は「内鮮融和の將來」「社会事業研究」第一六卷九号、一九二八年九月、九五頁にも提示されている）
- ㉑ 桃山学院大学には、柳原が残した未公開の膨大な資料が保管されており、女子留学生と柳原の間の書簡もある。これは、柳原が彼女らに与えた影響を明らかにするための重要な手がかりになると思われる。
- ㉒ 梅田安之、前掲書、三六〇―三六一頁

- ②③ 同会は一九二二年一〇月に結成され、三二年二月に解散した。『学之光』は一四年四月に創刊され、三〇年四月に終刊するまで、全一九号が出版されたが、現在、二二号分が復刻されている。
- ②④ 玄相允「求めるところの青年は誰か?」『学之光』第三号、一九一四年一二月、六―七頁
- ②⑤ 金翼之「学問を生命で賭けよ」『学之光』第三号、一九一七年七月、一一―一三頁
- ②⑥ 安廓「二千年来留学の欠点と今日の学悟」『学之光』第五号、一九一五年五月、三三頁／M H生「東京苦学の道」『学生』一九二九年四月、五八頁
- ②⑦ 「卒業生を送る」『学之光』第一七号、一九一八年八月、二―三頁
- ②⑧ 負朝陽「先後取捨」『学之光』第一四号、一九一七年一月、五八―五九頁
- ②⑨ S C生「新渡航学生諸君に」『学之光』第二〇号、一九二〇年七月、一三三頁
- ③⑩ 安廓「二千年来留学の欠点と今日の覚悟」『学之光』第五号、一九一五年五月、三一頁
- ③⑪ 崔承九「不満と要求」『学之光』第六号、一九一五年七月、七七―七八頁
- ③⑫ 「東京女子留学生座談会」『春秋』一九四一年五月、一四六頁
- ③⑬ 「実力養成運動論」については、朴贊勝「韓国近代政治思想史研究――民族主義右派の実力養成運動論」（歴史批評社、一九九二年、朝鮮語）を参照。
- ③⑭ 「日本留學生史」『学之光』第六号、一九一五年六月、一六頁／朴春坡「日本東京に留学する我ら兄弟の現況をあげて」『開闢』第九号、一九二二年三月、八三頁

第三章 朝鮮社会の近代的変容と女子日本留学

第一節 日本留学に対する新たな認識の形成

一 上級学校への進学志向からの日本留学

東京を頂点とする教育ヒエラルキーが形成されると、上昇志向が生まれ、人々の生活世界に広く浸透し、意識や行動に影響を及ぼす^①。上級学校への進学志向やそれが日本留学へ繋がっていく過程について姜福女（日本女子体育専、三七―四〇年）は次のように語る。

「私の家は普通の庶民です。普通学校の時から一生懸命やりました。家族は、私をどこまで勉強させようという特別な考えはあ

りませんでした……成績がよかったから、先生が『高等科に行けばどうだ』と言ってくれました。けど、そこに行けば、コースが決まってしまうでしょう。普通学校の先生になるだけでしょ。それがいやで、女学校に行きました。女学校に入った時は、これで終わりだと思いました……体育の先生が日本女子体専を卒業した方で、バレーボール部を創設されました。その部員になり、体専の話を先生が毎日しました。繰り返してその話を聞くうちに決定的な影響を受けました。朝鮮人は二年制の専修科によく行ったが、教師資格証がでることでした。日本で二年間やれば、女学校の先生になれるなんて。その時から行きたいと思っただけです。ほかの考えは何もありませんでした……もっと勉強しなければ、その時、燃える心を消すことが出来ませんでした」

姜福女に、自分の村と東京を結ぶ経路を意識させたのは、すでにその道を進んできた女学校の女子教員であった。普通学校の時から上級学校への進学に目覚めた彼女にとって、最上級の学校への道が見えてくると、それを熱望するのは当然であろう。一方、張晶玉（帝國女子専家事科、三七―四〇年）の場合は、「勉強しなければならない」という家や村の雰囲気の中で育てられ、村を離れ京城の女学校に行った。父は日本留学に反対で、朝鮮内の専門学校への進学を勧め、彼女も始めは同意した。しかし、東京に留学しようとする学友に比べ「遅れている」自分を感じ、父の反対を押し切って、彼女は留学を決心した。

上への志向を引き出す教育ヒエラルキーは、植民地下近代教育制度の核心的装置である。さらに重要なことは、人々に新しい模範的な生き方や目標を提供するものとしても機能していたことである。この点は姜誠姫（東京女高師文科、四一―四四年）の証言にも窺える。彼女は村から脱けだし、京城へ、東京へと、ひたすら上へ進んで、その難関を突破することを目指し努力した。「一九二二年、満州の安東で生まれ、普通学校に通いました。『女の子はみんな京城の女学校で勉強し、そこを終えれば、次の専門学校は日本へ行かなければ』というのが父の思いでした……日本が進んだところだと思っただけでそこに行きたかった。徹夜で勉強し、東京女高師にどうしても受かりたいと夜明けごとに祈って……」

二 資格を得るための日本留学

当時朝鮮では教員、医者、薬剤師、新聞・雑誌記者、芸術家などが、女性の新しい専門職業として登場した。日本留学は、その資格を得る道として広く認識されていた。例えば、医療分野で活動した女子宣教師の影響で、医者は女性の専門職業として早くから認識された^②。医者を目指す女性は、初めはアメリカに留学したが、併合以後は、その留学先が日本に変わっていった。そして、第一章第二節の女子留學生の学科別統計から分かるように、医薬科は家政科と共に、最も入學者の多い学科になった。尹丙淑（帝国女医薬専医学、三五―四〇年）は、医者になるために日本に行ったことについて、「當時は私たちが皇国臣民にさせるために、色々やったじゃない……その時は、自分の勉強さえできれば、それでいいという気持ちでした。ひたすら勉強して、医者になることしか考えませんでした」と語る。

また、朝鮮に中等教員養成機関が設立されなかった当時、女性にとって日本留学は、女学校の教員になる道として歓迎されていた。李順愛（帝国女専家事科、三九―四一年）は、「日本で勉強するのいいと言って、父母が率先して私を行かせたんです。そこへ行かないと先生になれないことが分かってるから……実際、行って卒業すれば、教師資格証が得られると、全部、受け入れて我慢したのね」と語る。

三 より進んだところへ、中心部へ

文化の中心地であり、資格を取得する場所としての東京のオーソリティは、植民地の人々に、様々な形で刻印されていた。より進んだところ、朝鮮にない良いところがあるところ、「東京」でぜひ学びたいという思いが、人々の意識に植え付けられていった。それについて、楊信浩（同志社女専家政科、三五―三八年）は、「京城へ行くより日本へ行くのが良いんだ。決まってる……日本に行けば、勉強がもつと出来るという認識があった。特別に、学んで何かをしようとか、そんな目的

意識はなかったけど。ただ、より多く、広いところで、学ばなきゃ、という気持ちだった」と語る。

東京が中心であることは、「朝鮮Ⅱ外地」、「日本Ⅱ内地」という帝国日本の文化地理的な区分によって生じたイメージだけではない。次の金明賢（日本女子大学家政科、三八～四一年）の証言から分かるように、植民地という現実が、中心は東京であることを植民地の人々に認めさせていく。「私は勉強に対する熱意が凄かったです。小さい時は普通学校の先生になりたくて、師範学校へ進もうとしたけど、私立女学校を卒業して、そこに行くのが難しいことが分かって、それなら日本へ行ってやろうと思いました。梨花女専は発展が抑えられてやっぱり水準が低かったです。だから、友達同士で行こうと話が決まって……内鮮一体と言って、そんな教育は受けたくないと思いつつも、日本が良いということを受け入れていたの……日本人が私たちを支配しているから、私たちより遙かに優れてるだろうと思っていました。だからそこへ行って学ばなくちゃって」

四 憧れの日本留学

より進んだ中心部に行きたいことは、東京への憧れへとエスカレートする。特に近代的産業や近代的技術・知識を経済的基盤とする社会階層では、日本留学が流行になっていった。次の劉榮善（帝国女専家事科、四〇～四一年）の証言から、日本留学を憧れる当時の雰囲気がよく伝わってくる。「勉強よりは、友達が行くから行ったようなものです。大勢の人が行ったわけではなかったけど。私の家は余裕があるし、私も行けるかなって。そんな感じでした……留学は憧れです。女学校の寄宿舎で集まると東京留学に行く話をしたの。東京へ修学旅行に行った時、千代田専門の先輩が訪ねてきたけど、『あら、素敵。平壤にいた時は田舎者だったのに、新女性になって素敵だわ』って、騒ぎ立てました。親戚の兄たちも日本で勉強していたし、東京へ行くことをすごく憧れてたんですね」

日本留学に対する人々の期待感とは同じではなかったらう。しかし、金孝徳（日本女子大学家政科、四一～四四年）の証言か

ら、日本留学が話題になり、流行していたことが分かる。「小さい時から父は、私に最高の勉強、日本留学をさせると言っていたので、女学校を卒業すれば、当然、東京に行くものだと思っていました。『私は日本女子大学へ行くんだよ』と言うと、クラスにばつと噂が広がったわけ。それで考えもしていなかった友達何人かが日本留学に行こうとしたわけ。私は、教養を身につけるために行ったの。見聞も広め、雰囲気にあわせられるよう、味わって来いということでした。当時は日本が流行でした」

上で指摘したように、東京が文化の中心であるという認識が広まって、東京に行くことに漠然と憧れるようになる。しかし、人々が東京を具体的にどのように認識し、そこに行くことに憧れるのか。それについて姜順姫（和洋女専家事科、四二―四五五年）は、次のように語る。「私と校長先生の娘、この二人が村から始めて女学校に行った女の子でした。私は一日も早く東京へ行きたい気持ちばかりで……小さい時から東京に漠然と憧れてたんですね。家の学校の近くに日本の小学校がありました。セーラー服を着て、いつもきれいで身なりのいい子供、その子供らが羨ましかった。同じ部落に住んで、同じ普通学校に通う、鼻水を流して汚くて田舎臭いこの子らがいやだった。日本に行つて教育を受けたら、彼らのように立派になれるんじゃないかって。そのセーラー服がすごく着てみたかったんですね。もう一つ、私が東京へ行きたかった理由は、あれです。幼い子供であつても、市場とかに行つて見れば、朝鮮人が無視されていることがよく分かったんです。白い朝鮮服を着るなど言つて、道で勝手に人の服を赤く染めたり、そんな出来事を見て、すごくショックを受けたこともある。だから、日本へ行くのが最善だと考えました。日本の小学校の子らを見て、人として大事にされたいなら、東京へ行くしかない、というような気がしました」

彼女にとって、東京のイメージは、「セーラー服を着て、いつもきれいで身なりのいい」日本の子供から作られた。しかし、彼女の東京への憧れは、そのイメージだけから始まったのではない。それと正反対の側にある存在、「鼻水を流して汚くて田舎臭い」朝鮮の子供や、道端や市場で迫害されている朝鮮人、自分は仕方なくその朝鮮人であることを自覚さ

せられたところからも始まった。つまり、日本人のように立派になりたければ、「人として大事にされたいなら」、朝鮮を離れ東京に行かねばならないという意識が育てられたからこそ、東京に憧れたのである。朝鮮人にとって東京への憧れが何を意味したかがここで鋭く表出している。

五 当たり前な日本留学

朝鮮の小さい村と東京を結ぶ道が作り上げられ、細くてもすでに何人かがそこを歩んでいると、村に住む人々の意識や行動は、その道がなかった時とは同じではなくなる。多くの人に憧れの道になっていった。人口全体から見れば、留学生はわずかな規模であったが、日本留学が当然であるかのような認識が広がっていった。

「女学校の時、私の三番目の叔父が日本へ行った。そこへ行かないと、勉強を進められないって。私もその時、日本へ行かなくっちゃと思った。行くとか行かないとか考えるまでもないわ。当然、行くものだと思っていたんだもの」という鮮于信英（日本女子大学家政科、一六〇―一三〇年）の証言のように、家族や親戚が日本留学にすでに行っているか、朝鮮の専門教育を受けている場合、彼女らは自分の日本留学も当然のことのように思っていた。また、「才能があるし、財力もあるから、わが家より貧しい家の子供も行くのに、当然、行くんだと思いました」という鄭必順（帝國女医薬専業学、三九―四二年）の証言から分かるように、経済力があり、勉強が出来る場合、日本留学は当然であることと認識されていた。

このように、日本留学は「大した理由も要らない」当たり前なものになっていった。朴貞姫（同志社女専業家政科、三六―三九年）が「日本に行くことをそんなに難しく感じないで、普通そうするものだと思うくらいでした」と言うように、また、朴容吉（横浜女子神学校、三七―四〇年）が「結局は雰囲気なのよ……自然に行ったような気がします」と語るように、東京に行く道があるから、そこに行くことになっているから、人は行くのである。

要するに、日本留学は、ある社会集団が共有する文化的行為になっていった。そこには、先に明らかにしたように、教

育の階段を上へ、上へ進んで行きたい熱望、中心に編入されうる資格への志向、東京という中心部を実際に味わいたいという欲求や憧れなどが絡んでくる。植民地本国の文化に依存している植民地の人々の意識が、日本留学をめぐる複合的にあらわれてくるのである。

ここで、もう一つ注目したいのは、人々の植民地本国の文化に対する「距離感」がないことである。「自分の家に行くように行くの。日本が遠いとか考えたことがない」という朴容吉の証言にあらわれているように、距離感を持たない意識によって人々は、東京へ当たり前のように、「自然に」進んでいくのである。内鮮一体という植民地支配の基本方針は、まさしく朝鮮人に植民地本国の文化への距離感を持たせず、その文化の一部に朝鮮人を吸収し、植民地本国への文化的依存性を拡大せよとするものである。この文化的依存性は、日本語常用、神社参拝などの直接的な文化的支配装置のみならず、人々の中心部への憧れや志向を広めることによっても深化していく。

日本留学生によって朝鮮に持ち込まれたものは多様である。その中には、朝鮮総督府が恐れていたように、反帝国主義、社会主義など、朝鮮の独立思想につながる諸々の思想や社会運動もあり、留学生は朝鮮民族解放運動の中で欠かせない役割を果たした。しかし、植民地本国の知の生産システムに依存せざるを得ない植民地型学歴社会が形成されていく中で、留学を通じて植民地本国から伝播されるものが何であれ、留学生本人の意識がどうであれ、日本留学は植民地本国への「文化的善意」^⑤を朝鮮の人々に拡散させる機能をも果たした。これを看破したのが第二章第二節で取り扱った柳原吉兵衛である。彼は留学を通じて日本文化が朝鮮に持ちこまれ愛用されることを予期していたのである。

第二節 ジェンダー構造の変化と女子日本留学

当時の朝鮮で、経済的に自立し社会で活動する女性のイメージは、革新的で一般の人々には受け入れがたいものであった。女子留学生も必ずしも新しい女性意識に目ざめていたのではない。しかし、本人の意識がどうであれ、当時、女性一

人で家から離れ遠くまで留学するのは極めて近代的な行動である。近代化は近代教育を受け、社会へ進出する女性を生み出すと同時に、女性を植民地型学歴社会に積極的に編入させる力学としても働く。言い換えれば、彼女らは新女性でありながら、近代的エネルギーにあふれ、自ら近代的目標を達成し、近代的規格を満たす最も典型的な存在でもあった。

ここではまず、新しい女性意識をもとに、日本留学を志したのかどうかを検討する。次に、女子留學生が帰国後果たした役割について検討する。その役割を明らかにすることは、彼女らがどのような職業につき、どのような社会活動を行ったかを分析することに止まらない。朝鮮の近代における経済的、社会的、文化的な新しい社会集団の形成と日本留学との関係を明らかにしなければならない。これは今後の研究課題であるが、ここでは、彼女らの帰国後の社会活動や職業について紹介する。また、そこにあらわれる女子留學生の「回遊現象」から、彼女らが果たした役割の意味について考えてみる。

一 女性意識の変化と日本留学

まず六四人の聞き取り調査の対象者の中、封建的な女性抑圧の不当性に自覚め、従来の女性の役割に疑問を持ち、新しい女性像を目指して日本留学を考えたと答えた人は、一三人(二〇・三%)であった。その中、日本に圧迫され遅れている民族の現実と共に女性の抑圧的な現実の改善に役立ちたいという意識から、あるいは周りからのそういう期待に答えて日本留学したと応答した人は七人であった。

安賢順(帝国女医薬専業学、三六―四〇年)と姜信珠(奈良女高師家事科、三九―四二年)は、伝統的な女性の生活に問題を感じ、新女性像を模索し、薬剤師や教員という専門職業を目指すようになった。新女性像について、姜信珠は女学校の女子教員、金鳳善(帝国女医薬専業学、四一―四四年)は、社会で活動していた女子医者を通じて自覚した。また、朴華善(同志社女専家政科、三五―三八年)は、朝鮮民族の現実を意識し、その支配者である日本を知らねばならないという意識から

日本留学を決心したという。

このように、女性や民族の現実についての自覚が日本留学への動機になっている例は多くなかった。しかし、女子留学生の間で、職業人を目指す認識はかなり一般的で、六四人中、五〇人（七八・二％）が社会進出を希望し留学した。自分を新女性として確実に認識していた人は、三八人（五九・四％）を占めた。日本留学は、植民地下女性にとって、社会に進出するための重要な通路であり、それを通じて新しい女性意識に満ちた新女性が生み出されていった。

二 女子日本留學生の帰国後の役割

彼女らは帰国後、多様な社会活動を行った。まずよく知られているように、当時の民族独立運動や女性運動のリーダーの多くは日本留学を経験した^④。しかし、彼女たちの活動や思想が、留学生活からどのような影響を受け成長してきたかについては、まだ明らかではない。現在、利用できる彼女たちの文章や自伝にも、それは全くふれられていない。

植民地時期における女性運動の代表的な人物である黄信徳の場合、留学時代の何が彼女に影響を与えたかを考える手がかりとして、次のことが知られているのみである。すなわち、一九二二年、日本女子大学社会事業学部（女工保全科）に入学し、二三年、女子留學生と山川菊栄との非公式座談会を催し、山川の論文の一部を朝鮮語で翻訳して『ルクセンブルクとリープクネヒト』という書名で出版し、^⑤二六年、『労働婦人の現状と組合運動』という卒業論文を提出した^⑥こと。

しかし、当時の女性運動のリーダーたちの意識が、留学時期から育っていったことは、留学時期における彼女らの活動を見れば明らかである。^⑦一九一五年、「朝鮮女子留學生親睦会」が結成され、その目的を「在京朝鮮女子相互間ノ親睦ヲ図リ併セテ知識ノ啓発及鮮内女子ヲ誘導感化セントスル」ことに置いていた。^⑧この組織は一九一七年から機関誌『女子界』を発刊した。また、女子留學生の組織は一九二〇年、「朝鮮女子学興会」へと改編され、「朝鮮女子ノ教育普及ヲ図リ広ク知識ノ向上ヲ計ルニ在リ」という趣旨を標榜した。その年、女子留學生講演団を朝鮮に送っている。

このように、女子留學生の運動は朝鮮内の女性運動と密接な関係をもっており、彼女らが卒業し帰国すると、朝鮮内の女性運動のリーダーになっていった。例えば、はじめての在日朝鮮人女性の共産主義思想団体と評価されている「三月会」(一九二五年三月結成)の中心メンバーである黄信徳と李賢卿などは帰国後、京城に「中央女子青年同盟」(一九二六年二月)を結成した。また、二七年五月には、社会主義系と民族主義系の協同戦線女性組織である「権友会」のリーダーになった。このように、日本留学の経験が植民地下における女性運動につながって行った。しかし、女性たちの日本留学が朝鮮女性運動に及ぼした具体的な影響については、これから明らかにしなければならない。

次に、女子留學生が果たした役割として、もう一つ重要なのは、恋愛結婚から洋装やヘアースタイル等のファッションにいたるまで、彼女らが変化する文化の先導者として社会に現れたことである。このような彼女らの動きは、一九二〇年から三〇年代の『新女性』、『新家庭』などの女性雑誌でよく知られていた。元女子留學生の証言からも、朝鮮服で日本へ行った人が、その年、夏休みに故郷へ帰る時は洋装で断髪した様子に変わっていて、家族や周りの住民を驚かせた例が少なくない。

このように女子留學生は、朝鮮の小さい村の生活の中に新文化を持ち込み、知らず知らずのうちに、その村の住民たちに影響を及ぼしていた。なかでも、もつとも目を引くのは、女子留學生がモデルになり、さらに新しい女子留學生を生み出していたことである。六四人の元女子留學生の中、三二人(五〇・〇%)が、日本留学をした人から影響を受け、自分も日本留学を考えたと答えた。具体的に見ると、一九人は学校の女子教員から、七人は家族や親戚の姉から、五人は女学校の先輩から、一人は女性界の指導者から影響を受けたという。

三 女子日本留學生の「回遊現象」

女子留學生が帰国後、何をしたかに関連して本研究で注目したいのは、彼女たちの「回遊現象」である。それは彼女ら

が自分の村を出て、各教育段階に最適な環境を求めて、府へ、京城へ、東京へと移って、成長をとげ、起点である村の教員になって戻る現象をいう。

聞き取り対象者の中、四七人（七三・四％）が帰国後、職業につき社会活動を行い、そのうち三三人（五一・二％）が教員になった。教員としての最初の赴任地を分析すると、二三人は故郷あるいはその近所の村、三人は女学校の時の村、七人は他地域であった。つまり、女子留學生の六四人のうち、二六人（四〇・六％）は自分を育てたところへ教員になって戻った。

彼女たちの最初の勤務地での勤務期間は、平均二―三年であり、結婚、育児などの理由で退職したことから考えると、当時、彼女ら一人一人が直接果たした役割が大きいとは言いがたい。しかし、東京を頂点とする教育ヒエラルキーの完成品であった彼女たちは、村々の人々の模範として大きい意味があったと思われる。言い換えれば、日本帝国の精神を押しつけるために学校で暗記させた教育勅語や様々な教科内容などより、彼女たちの存在そのものが、進むべき道の案内者、また、その道にかざられている商品見本となり、植民地支配に対する人々の不満をある程度吸収し、人々が植民地社会の現実を承認して、その社会の一員として適応して生きていくのに重要な機能を果たしたのではないかと思われる。

最後に指摘したいのは、彼女たちは、典型的な近代的規格品であったが、果たして近代的なものばかりが彼女たちを通じて運ばれたのかという点である。崔宝卿（津田塾専英文学、三三―三七年）は朝鮮に帰って、日本で学んだキリスト教精神や西洋の思想ではなく、皇国臣民としての日本精神を教員として教えなければならぬ植民地の現実を自覚した。この問題について彼女は、卒業礼拝で『一人の力と多数の力』という題で話した矢内原忠雄先生に次のように相談した。「私は卒業して帰って教員になります。どうすればいいでしょうか。生徒にどのように教えたらいいいのでしょうか。私は日本精神を教えることは出来ません。日本が今、内鮮一体と言っていますが、私はそんなこと叫べません。英語の教員として、子供の前に立って、どうすれば良いか分かりません。自分の良心に従う教育をしなければならぬですが、彼らが叫ぶ日

本精神で私が教育するわけにはいかず、だからといって、勝手にするわけにもいかず、どうすればよいか分かりません」^①
このように、女子留学生は、帰国後、教員として、天皇を中心とする反近代的で反民族的な日本の思想を教えなければならぬ難問にぶつかっていた。学生を神社参拝や勤労奉仕へ動員したり、国語・修身などの授業でその教育を行ったりしなければならなかった。女性教育に関しても、婦徳の涵養という朝鮮総督府の女性教育の方針に従い、その範囲を超えることが出来なかったことが、元女子留学生の証言から分かる。

近代的産物である女子留学生が、反近代的なもの、あるいは非近代的なもの（近代性の有機的な一部としての非合理性）を伝える通路になっていた。もちろん、この「パラドックス」を、多くの女子留学生が認識していたとは言いがたい。多数の元女子留学生が「私たちは民族というものを忘れてはいなかったが、でももう日本人になっていた。言葉も名前も全部変わって、朝鮮人でありながらも、日本人が生きているように生きていたにすぎない。独立が望ましいとは思ったけど、このまま世の中は続いて行くんだろうと思った」と語ったように、多くの人々にはパラドックスがパラドックスとして認識されていなかった。

いずれにせよ、この問題は植民地下における朝鮮社会の近代化が何だったかを考える上で重要である。近代的規格を満たした人間が、近代的精神を持って生きていけない構造は、天皇制国家日本の本質的な矛盾であったが、植民地朝鮮においては、さらに民族的矛盾がそこに加わり、極端なものにしていた。

- ① 一九二〇年以後、朝鮮では中等課程を卒業した女学生の二〇%以上が上級学校へ進学していた（朝鮮総督府『学事参考資料』一九三七年／「官公私立学校卒業者状況」『調査月報』一九三三、三六六年）。また「新女性」の記事によれば、一九二五年、七校の女学校の卒業生二六五人の中、上級学校への進学希望者が一三八人（五二・二%）で、その中、日本留学の希望者が三四人であった。「新女性」一九二五年三
- ② 李效再「開化期における女性の社会進出」『韓国女性史——開化期——一九四五——』（梨大出版部、一九七二年、朝鮮語）七二―七七頁を参照。
- ③ 「文化的善意」は、ピエル・ブルデューにより定義された概念である。それによれば、人々の慣習行為、趣味、性向、生活様式などは社

会階級によって異なるが、中間階級には、支配階級の趣味や生活様式に対する「文化的善意」が広がって、「模倣文化」が形成されるとい
う。ピエル・ブルデュー（石井洋二郎訳）『ディスタンクシオン』
一・二（藤原書店、一九九〇年）

- ④ 三一独立運動に参加した金マリア（東京女子学院高等科卒）、黄愛徳（東京女子医学専門学校卒）をはじめ、一九二〇年代の「新女性運動」の旗手であった羅恵錫（女子美術専門学校卒）、金明淳（東京女子専門学校卒）、金元周（東京英和学校卒）、二〇年代の社会主義女性運動のリーダーであった黄信徳（日本女子大学卒）、李賢卿（日本女子大学卒）など。

- ⑤ 李順愛「黄信徳のこと」『三千里』第一七号、一九七五年、一〇〇～一〇二頁。

- ⑥ 日本女子大学同窓会『家庭週報』第八二八号、一九二六年二月一日

おわりに

日本留学は日本中心の新たな近代東アジアの勢力版図をあらわすものである。またそれは、アジア各国における近代的
社会変動過程を反映する。特に植民地時代における朝鮮人日本留学は「植民地型学歴社会」の形成過程にあらわれた社会
文化的現象であった。

植民地本国の「知の生産システム」に依存せざるを得なくなった朝鮮では、東京を頂点とする「教育ヒエラルキー」が
形成されていった。朝鮮の小さな村と東京を結ぶ「教育通路」が出来上がり、人々は植民地本国に知識や学歴を求めてそ
の道を進んでいった。女子留学生はその道を歩む新しい集団としてあらわれた。植民地下朝鮮の女性にとって、日本留学

- ⑦ 女子日本留學生の留學時期の活動については、李順愛「在日朝鮮女性運動——一九一五～二六年——」『在日朝鮮人史研究』第二一号、一九七八年、二九～四四頁／「在日朝鮮女性運動（上）」——権友会を中心として『在日朝鮮人史研究』第三号、一九七八年、一三～二五頁／「在日朝鮮女性運動（下）」——権友会を中心として『在日朝鮮人史研究』第四号、一九七九年、三〇～四一頁／山崎朋子「解放の道を女子教育に」『アジア女性交流史』明治・大正期篇（筑摩書房、一九九五年）二八三～三二〇頁などを参照。

- ⑧ 警保局保安課「朝鮮人概況第三」一九二〇年六月、八九頁

- ⑨ 警保局保安課、前掲書、九一頁

- ⑩ 矢内原忠雄「或朝鮮人女學生との会話」『矢内原忠雄全集』第三三卷、三四三～三四六頁にも、彼女との会話が紹介されている。しかし、

- 崔宝卿の証言したこの内容は、そこではふれられていない。

は社会進出の重要な通路になっていった。

留学の動機は様々であった。『学之光』の論客たちのように、文明の輸入者として自覚した留学生も大勢いた。女子留學生の中には、教員になって子供を教え、文明の伝播者の役割を果たそうとした者や、従来の女性の役割に疑問を持ち、新しい女性像を目指して日本留学に行った者も存在した。しかし重要なことは、日本留学は一定の人々の間で共有される文化的行為として定着していったことである。つまり、人々は「教育ヒエラルキー」を上へ、上へ進んでいこうとし、より進んだ都会の空気を吸うために、中心部に編入されうる資質や資格を求めて、当たり前前の行為として東京に流れ込んでいった。

朝鮮総督府は、留学を通じて下級実務官僚や専門技術者、親日的人物の養成を意図した。しかし、多様な知識や新思想が朝鮮に持ち込まれるのを恐れ、留学の抑制や留學生に対する取締政策を基本としてきた。民間人として朝鮮人女子留學生に深い関心をよせた柳原吉兵衛は、名望家、クリスチャン社会事業家として特殊な人物であり、「文化的」な方法による「内鮮融和」のため先頭に立つ女性指導者を育てようと努力した。

日本の官民両者の立場からは、留学を文化交流として捉える観点はなかったが、それは朝鮮社会に新しい文化を伝播する重要な通路になっていった。日本留學生によって、さまざまな新思想をはじめ、新生活様式、ファッション、文明の品々にいたるまで、多様なものが朝鮮に持ち込まれた。それによって、文化の中心地である東京への憧れや「文化的善意」を拡散させていった。言い換えれば、女子留學生の「回遊現象」に現れるように、中心文化が朝鮮の小さな村の隅々まで運ばれ、その中心文化を構成する様々な価値が植民地の人々に伝播されていった。その結果、人々はより進んだ東京に学びに行くことを憧れ、さらにそれを当たり前な行為として認識するようになった。

以上、今回の研究で明らかになった点を踏まえ、今後の研究課題を次のように考えてみたい。第一に、女子留學生が日本での生活の中で、「日本」という近代社会をどのように理解し、どのような価値、知識、生活様式を内面化して朝鮮社

会に持ちこんだのかについて明らかにする。本稿では取り上げなかったが、元女子留學生の聞き取り調査で、彼女らは自分が朝鮮人であることを常に意識し、その「ハンディキャップ」を克服することが行動の重要な動機をなしていたことが明らかになった。すなわち、彼女らの生活には、「日本人がする通りにする」、「日本人の前でしくじらないようにする」、「日本人のようなふりをする」という意識や行動様式がつきまとっていた。このような留學生のメンタリティーは、近代的個人倫理と天皇制思想など、矛盾する価値を内包する近代日本で、何を選択・受容するのかという判断の重要な基準となった。これはまた、近代的規格を満たした人間が、近代的精神では生きていけない天皇制国家日本の本質的なパラドックスと、日本と朝鮮との民族的矛盾のなかで苦しんだ朝鮮人留學生の精神構造とも関係していた。

第二に、女子留學生が日本で学び消化したものを実際にどのように朝鮮社会に移植したのかを検討する。例えば、解放後、女性指導者教育の先駆けであった高鳳京の例を見よう。彼女は一九二四年に同志社女子専門学校英文科の予科に入学し、一九二八年三月に本科を卒業した。引き続き、彼女は同志社大学法学部経済学科に進学して一九三一年に卒業した。その後、一九三五年までアメリカのミシガン大学大学院に留学した。修士課程では経済学、博士課程では社会学を専攻した。帰国後、解放まで、彼女は梨花女子専門学校で社会学を教えながら、子供や地域住民のための社会福祉施設を経営した。彼女は一九六〇年代から、自分が留学したアメリカの大学のような大規模の大学より、同志社女専のように家族的・宗教的な雰囲気の中で少数の学生を徹底的に教えられる小さな大学を目指し、ソウル女子大学を設立して経営することに力を注いできた。彼女の教育理念や経営方針、様々な教育プログラムには同志社女専の時に受けた影響が様々な形で溶け込んでいる。

最後に、近現代朝鮮の女性運動史における日本留学の意味を明らかにする。戦前、女性たちは「植民地型学歴社会」に編入され、日本に行つて、日本が西洋から受け入れた新しい女性意識を朝鮮に持ち込んで普及させた。戦後、アメリカニゼーションという文化的現象が韓国社会を風靡し、西洋社会で生み出された学問や思想が人々の思考を支配して、女性運

動も、アメリカから直接入ってくる女性解放思想の影響を受けて一九七〇年代から活発になっていった。戦前の朝鮮の女性運動や思想が戦後のアメリカニゼーションとどのように融合、反撥しながらつなげていったのかについて明らかにしなければならぬ。

- ① 入江昭「二〇世紀の歴史と戦争」中村政則編『世界史のなかの一九四五年』（岩波書店、一九九五年）一一二〇頁

Modernization of Korean Society and Women Foreign Students in Japan
—1910-1945—

by

PARK Sunmi

In Korea, dependent as it was on the “knowledge production system” of the colonial metropolis, an “education hierarchy” formed that had its pinnacle in Tokyo. A veritable “education road” came into being that linked the tiny village in Korea with Tokyo, a road along which people trod in pursuit of knowledge and academic achievement. Women foreign students emerged as a new group making its way along that road. To Korean women under colonialism, study in Japan was an important vehicle to social advancement.

Although individual motivation varied, study in Japan was commonly seen as cultural behavior by a certain strata of people. Thus those seeking to rise higher and higher up the “education hierarchy” made their way to Tokyo in pursuit of the qualities and qualifications that would enable them to be admitted into the inner circle so that they might breathe in the air of the culturally advanced metropolis.

While neither the government -General of Korea nor the Japanese people were in a position to seize the opportunity of these foreign students for cultural exchange, the students’ stay in Japan provided an important means of disseminating a new culture in Korean society. The culture of the metropolis was carried to the remotest villages of Korea, and the values which constituted the culture of the metropolis were disseminated among the people of the colony. This increased even more the attraction of study in Tokyo, making it seem to be a matter of course.